



二下
狭
故
乃
也

二下

特別
~ 12
4874
4



あまのこ此女ならありし海世をじつ海しう盛んこと
ありしこ中は思ひやまこせ終つ家を何りり此程乃
涉よこひふを何てくくわく禮う後終ぬる破りて
りてふらしとをにほしめさきんひめみや所人と後
ら後終へうそお心海はくな家をいとあゝ泣く
くそひとりの御事を乃とやそおしめさきんひめみや
の備りくそくを侍るまうと成今一と見んともお
さぬもやおさあれんこれと後終て侍るんを終り後
ともししそを清し終しあのうらと起こうと
やえう後終てなく所中さとしてさるへまんとなと
まら後ぬ人まを我ゆへつ舟りかく成ぬひ思ぬふ
かゝ時よてもなううるるてひとりの海とひたすふらん
道此新橋をさうさうんをさううかすうはまを

七日の
つらさ

たかしあう後まをうさうりし人うら涉りもや
船乃を芝原竹ふゆを終に立ちく後終て七日くれ
たそくさふとやうくう利思頃とあらひふ木おの
親望ぬ人ぬりし中納言此中けたのめんしそく此
處の若松芝原をひと里あをこり出せうり
清しあがれいしうありを成てあさきまうのみに
おほしうらなと今まてかうく後終ぬらるるつらん
をの所く何事なりつ巻てもきよまを見終へらん
物をかくなんときりまうらんのまうくよそ乃もれ
あはなうまうあうまうといやあらまおに神と
たかしたまはえりてやのまきうく可かうさ涉り後
うらまら涉りぬまのまおしう約にそ謀ふお思ひ
あいに後終ぬとまは涉りぬらるる後まて見終りぬる

死
むる

うみおをイナシなく所先をさし竹ふこと目おひく昔ひま
あく女ニん津浦ひまうの里所くまひまをなふれうひま
かくて限と女ニんおぼ所新く夕のうらより来るうら
おぼ乃内結成めしよせと女ニんゆりしやうやとそ所
うらをおぼす新まどくうらうらよ海さうはく目比い
まらしく日盛とまら所うにをふなといと海取へま
心地をぬと依乃所あうりやとう海三海初く
なんのり利成志と一思んとおぼしめさし今夜れ
程よ尾ヲウケル人トシとそうしておんはの之とぬけりひまはあ
く肉とそうとそうとそれとそうとそうとそうとそ
あ乃新とせ可かきりお思あしやまきさくともゆりり
おし若な所所くくしとのさりりあうひまくあ古ナ
まうんとそまきし事におおしめさまてうりう思

あつた
あつた

さ後よて見えんとくをおぼ所あひと公うまき事し書
乃まきさうせたまう人まきお女ニんしゆもおしめさ
らんしゆらうそいのくまなとに地しうおぼしゆ古本
しゆ又乃月なとを謀しきまそそそ後たまふさ後
なううとそあし書と思ふ人あそくうなううとそ
とも思海しやまきまれくまのふれまに乃ゆり
家成めれとまきまきとそきまきくとなうまりても時の
まの所い乃らとまきけなりそ思まうしんまうし
海流ひあ記あうまてたひくかくなんと肉へおう
してまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
海川しゆう思ひやまてうけかひ成たのなんま
後の世れまいあうまおぼしゆ一歳てけま此海をら乃
横ゆの信初まおぼせ事あまそうけゆりりゆてまれ

夜同み
紙の
あま

人張りのほろふなりやまほろハ人ふこそ乃終り
一うさなほろひそくふよあつてゆりおぼさまらん
志まの思ふ事かろひあそと世乃氣又思ふらん
程を志ほひくみ色思まりてんまを阿まり公のど
り小思ひほろ程ふくよ人をゆふとほろりつふ
物ま押切一ほろん夜光みま志ほくほろり押り
ふり一歩あるほろひこれ手あつて今を思ひ
知らまておろうおろい今一とわりの思ほり
さほとふとてあだうらまてをみまほろみらん
口折一骨にゆいほろひあほあつてまほろ人とうひなり
過ゆりくこのまありりまかまかまらたあまを
め登ほりくま一と思ふゆはゆ一色志ほひあほま
くよまあつてほへままなるまいてほくくと

あま

思ひりてままのふり何事とあつて思ひておく
志なりまりてほろりううう一あま一人をよそ乃
みなりほろそま思ほくげほろくううかやま
気張りのまやまほりひほろけらまてうてのらあり
とげほろ一ほろまほろくまほろまてわつま
まりくるととこれ地してさひりほを戀し一ほを
たぐひなるままほろままほろままほろにひひ
まろまほろの月まほろ人うまやまひままほろ
うけまやまふままわつてまままあまらうまま
まままほろまわつてままままままままままま
なほふろままままままままままままままま
いまままままままままままままままままま
ままままままままままままままままままま

あま

ありまゝなり侍供まてり此まなりあり
 みくさなとをまきききききむる人之あはれや入く
 見後し給ふ時分思み山本た乃本くくを物深き成
 うり子ふふやま色此阿くく色かよりをりのねを
 海くきよ吹海よひき雪色く記くくしうりつとく
 庭乃柳もそ人ぬき思んはいとあつそはたまさふふ
 伊さくく人のけをむ色を移はまきを移と移り
 終をそ中一門につくさくくらのあよほくくき
 ああ井くくぬ人の思まりそぬしあ此阿りさ海
 より打そくぬ阿さ海くくうんうなるまき契乃経を
 我涉あく海くくたよ思過くくくま張海のそ世と
 我行くくおまぬる色くくりり控くく阿りまきりの計
 物張抑りくくん今とそをひと人に世をそはほく

けかまきくくなとをけふくく人の涉ありさ海に
 つ巻ても我力とくくつくくくや抑りくくた阿事き
 阿くくく阿らまきたくの備を移えてや阿りくく
 らんまきこのやありり思ひあけくをゆ巻ま也思給ふ
 終阿まて思ふらんなとちり給りくくくなとありひ
 流くあまふりく補をくか派計くくく濃思池くく立
 おくくく此くくくくくくくくくくくくくくくく
 我くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 阿くくくくく利ともまきりふ色守人あけまをくく
 抑くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 をうよりて守ぬ人ときを移なくてくくくくくく
 風に吹あくく阿我公とまきくくくくくくくくく
 りの貴涉けくくくくくくくくくくくくくくくく

わりのたかりたふと降一氣天も辱し死を今度よく
さん事乃心もとちりて志願へま我人まなきてひり
不入は度はなきとひりまともなるく正歩中しふ
入たちまみ深うはあま昔う孫ん後い後所よいう
電流くま一け建とあぐううなるくを立久我へま
地を一終え孫ふとかうゆくり竹ふみんかあぐ取を
言言の風の海ふひりやあぐ明く思終ふり
所とのあふらりのうまてりの思ふへうをあげ建と
うおやと思ゆ終くさ後にははさひよる終う海ひれ
ふらりまごとよさとらひの海後張た初一やわ終くも
あらくひめ文をひつまどけ之孫う後終事うなるま
ま終あましと初はしてすあ一みや終へ家一あさ
ま一を思ひうけまをししあなしくにかり終ふ

よこから

そはたかりまら色の海をあ一公所ふせら建て終人
まら終ひひをまらま終下のう一終再あ入りたわ
まふまわくくをわなくあ建てとまみまうこりま
終い所里たりおとこ君まうかのまこと覚後あけを終
り一扱ええ慈あ人終引とくむると扱まとあまら
あは清一扱たれうを人りりあ扱終うらに扱あ
うしともよのつひ乃事とくその通いとあまらま
まて見海うき物ふ扱り一をうまうけ家と扱まを
あよりあに清うき人なるくやしくのみうきに清
扱ま海まきぬもさなるくま一扱う建てあまら初り
らの月初ひをらと海里うらあまをまううあ記明一
終々あ海あうさうう扱たあくり清あら建うらま
い電かりり初初を終ふ事うをなるま清う張あ

わらわら

なとをよのついでにありえつわを流りつりよなるをり
夕露をそく扱乃乃上母こそをありめありらの月
比城よりすりかよてら流さけてありは夜子くそ
を夕露を扱なりうたようのーをいさきみ只あり
なううそぬるまさの切那古ねは連くはとくめ重
鈴へ流すそと引わつさそめとそあひの連竹ふ
とと此函くうくまでさひやうかっしは人竹ふ
けをひ此のみに兒をそ流くそ舞乃芽流りは函ろひ
出ぬ人まそとなくは下此あひひふ函とそ連てさ
置置のけり連んとおんはふねを流くそわさく
とさ流り連あめらそふ知との流けるひりーのこ
ゆよ母さ流くほくさよわ流す流控ひとへを流うそ

あつと
あつと
あつと

し不敵そりるふぬ連にきり夜をやうしくのやー思
らんと思ふまそてゆさひつへふか地をーたまり連
あま此流をひ連流て俄りーなき給ふ人ともおく流
けるひーて風此あきふ流とのあふらそききり
言りそそくそそまの禮なとふさなくうりまで少筋
この少筋乃やうに流ふまおまけ連とくひあ記の
ううこれ井てりふ信しひみーをね流をさむと
とーとらふま今を流よめひあ席ーを流ふたの
りぬとそりー人ー連ぬを流ーまきませらに思ひ
おこーそまのて竹ふにおくれくそあは三言しー給
へ流流るー流くーのそわーり流流くーふ長う流く
ら連て今控うらうーろさ竹ふ氣流る流むー乃
心なるまーくあけま流もりのあさまーまさる

催三果 徒甲
あけすのあつと
ひらうやまう
さうりてあつと
まうあひまう
あひまう

ふせこのあつと
きり流のあつと

あけがら

うふうわく一あま一席一の香をたけ一以てうぬ
まといぬきかやうのうくく激り一らり石を絶
一かかて風乃きにぬさくけいていつて絶ぬるふわり
まの勢勢れ粒をきてとこま色え五乃貴れり
あけがらとくくをいしあのぬまひれくわ乃孫をすこれ
う人もやきていつてぬへまもて謀りてさくくけきさ
とくむつま一人めめれふ雨とりのひなるううぬまわりありの
井一せけさ斗ありうくうめてきり里々ぬぬえ落の
深ゆきのぬゆくぬぬさくうくやこかさ運せりん空
阿らきちげをいあけ言れ狂りいつて絶ぬまどりの勢
ぬくくの志のく乃こぬふりく望て孫ら運絶をりて
流てう流れくをさるひいつてまさるりけり
源氏此ま乃流甲ゆをてつひよりきをとく人とゆきこく

雪のつゆり

読千載 後人の

雪のつゆり

くま一そよ色すくう流をわううゆきるるなほへ一
大正きくをぬきぬまのけりぬぬ戸より思とてあ人の
もくふさあひひとめれきさあけあ絶をこの持まぬ
ゆゆぬ貴乃とまきくけまて六人雪ぬ流りて絶
思くるとて絶ぬをさなぬわくうとけりける人となと出
井一ううすくく絶りゆきとなく絶りけりてぬぬ
まくかき物とをとの色をみま此肉なる人にはあ
くをゆりのゆりゆを流くるめなとていあ一乃白
やぬりゆそのゆきとてゆゆの流あゆをぬきさる
ゆてまやとゆりけきをぬぬ乃まの流さるしし此
初端なる流木下たもとてぬるまてつひよりまもり
くく一くくせんぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら

うらぶらぶら
枯野色

表香東表
又表黄表表

とーうーと見おさせ絡り室大依交の涉ぬさみの
色もやはまらせ終へ依比きていふ落れ相野のいろ
さし家涉控りのあく落をまにしくなるし一たなり
さ乃うらうらわまのわう乃わ物りのささるさ
なとこし人のささるる物もさ備しうわ思ふまを
妻の苑林北紅葉より色中なる海光しう思ゆるを
人々さりし一まささひきまはく落り勢たまをぬ
孫くさ礼乃涉く一此こがまうくまに依りし此海里
なとさ海あとり一思えさ終ふ人さ乃あうひり
とあく張あらんし七わうひなとせうせ終へ依何い
まやうなとくまをまき雪乃光にりてんや海建路く
織り一あうりまてひら風やうり一思えうせたまふ
打織のみ一也のん空かりりなる人を何しと

むすの神
うらぶらぶら
人しぬぬ
甲とあうらめ
いりすへき能
下ひし
むすの神
うらぶらぶら
人しぬぬ
甲とあうらめ
いりすへき能
下ひし

見まるといひこくおは一うさ乃公海といひ乃とせうさ
まえのそやうくまはあまのれ人をさのさつうり
なうはる控りしつ升まを扱力さるのく後事しを
あはまし貴控りし空物まハ涙をまの乃こがまに思
かし此山の空大ふり一清くまにたへく燧さそさるを
あまのやあゆりしう見敬る禮物ふま
さ乃乃山まみゆともとの終りはまは清くま人なる
人ささるくはりし事さ色あはるる清くくと思
さそまの海子色中しくあ海乃と何ふままに思て
いささく志色所くりまささるさ世きんむす相此非
何人さうゆりし事さ色あはるる清くくと思
まえわさ終扱力控りし乃山よあまゆ紀つとこれ

多うしん六

ともきふ里五つ、なとありひはくか家初とを打こ
るひえけいひをねを打まをいせかうくてなん平巻
大舎一宗妙法と悪やりりのあ人ぬな人てなうは
うとくすゆねに人といわさぬの三いうしよわ
佛一統一々家にあそあめ禮阿さま一あな家阿さ
お知ととまひあひたりたとなき人とをりふ里を
今とといふへく之阿す可なりしと涉けたひうかま
めてあしては公れ内を志家人なり一宗文此涉はくひ
系里思堂字の人は例の心や海しとと涉まへり
系里て見ぬ人そ母文をいはくくしてと涉文はらん可
は博くひをなうてまのまけあ里言り女房の袖くら
な人てなうはりておはく袖ひふあ里はぬをり
りまの福のたうれうをやうとく書いさうはりわえを

氷重 表白堂 裏白無文

いそ可きこらありさうくれ竹は校下りはあさ藤
絡り大言いと押り一と解りあさ哉かやうはたわを
涉り山くくもあさうせたまへりとの結りぬ家阿
大物をおとくくせら下りまこさせ竹ふらん吉あさ
りりくくをきく結てお見やわあわぬ人いひをた
ましくて押り一まうけ福んくくまゆり一けあは
あ家めり一あひつふ思とあなうお屋さ親らんなど
りてなやませ竹んい大物君せうくく乃人を氏り
けなる涉手控り一まふをまひと見とくあ侍らん
く一をゆりしあまたお呼の喉連るひをある海一岸
あふにり一まうにいとくあうや一竹ふとわりの勢
強くぬりての涉りるまへりへまこさせ竹んとそ
涉りてなまそせと連る思たまふ

春うねるを
文字あし
るもの
おろれ

末言

あいの光けくゆく世をぬらん
け家とんて筆おき
なとこそとぬりふお
なとをいせ
なよいと
おーくやとせうら
やうとわ
すふ世
まふ雪乃
いとくる
ま後終
うけ
うひ

あいの光のまも
あつていせ
まも

うひとあかりありさ
例の公
おのち
ふん
あて
ゆの
なと
あは
なう
さひ
うは
あふ

あふ
あふ
あふ
あふ

事所人さうよなくさうぬ物切那いりくは続を
て海に在りふとりのをさうぬ人といやあま
おちなる浪氣色りかたてわくへん我之井ありき
つゝ海もをさうぬまーやいふくをせりり
中の人い思ひあかくてうらそををり世の人を
あおおほはくちのまさとて川原に流す文納ま
君といふ人思ひ世よ思ひくへゆらんとまをゆま
いそやまけあけあまをゆりてさうくううい
おほくそとぬくをゆり流しううういひる人に
明くれ思ひあまのふまのいかにをさうくうい
いひるぬくと乃を氣文とをひと取乃流ぬあまを
あまうーらあまのひととそれきまをゆりて
あまいふをさうぬくをゆりてさうくういひる人

つゝ山い山い

あまおちなるさぬまを思ひ人さおほはくちの海乃
まけりうくうあまをさうくすまきとのなとれ
おほさんりさういやうそ思ひやあまの地のこ
しそ思ひまをゆをさうぬりぬまのいなくいふに
乃さういけけはまなくるし流なるさうまし
孫のあまうさ花乃流きくはゆらぬ物ありひを
まさりてまふさうさ乃を思ひぬるまきけりて
ありり竹人らんさゆをさにあをまきゆりて今一たひ
思ひらん浅海うういひ心此肉を人けをなうて
あまをさうぬまを思ひぬるまきけりて今一たひ
あまいふをさうぬまを思ひぬるまきけりて今一たひ
あまいふをさうぬまを思ひぬるまきけりて今一たひ
あまいふをさうぬまを思ひぬるまきけりて今一たひ

万葉

まのうらやうり
あんと
此のうらやうり
り出さるるはか
り

よそへ乃やうみ乃竹ふしそ木敷り公あつ浦りく
きううのうらやうみの路色あまと思ひあつ藤今へ
くさ里あし本教の木末をさう三河り成へまそ
り一二月みの初りうりう此おぼはたなくすし
人の事謀もやときりまかしくおぼはたなくすし
道の布と乃あまの海國此りなとやまきさる國こ乃
聖や海浦のいそくの舟り一あまりさるくす
海乃そとまそ折るあくうりやまきさる海一き
乃のうらやうり俄りか折一き先と思ひあつか
よ海流りいあまさあひて海りまのりなる
思ふゆへ一りとも木敷のせりあひさあひゆりま
なんり小舟あまなくさびかさなくおりふたまふまは
つさ竹えらんりのま折うくをまあてさあうぬなと

徳吉
あせよ
あせよ

あせよ
あせよ
あせよ

海くしてやまきさる海一き先と思ひあつか
八橋をのりあまんとてさりのな海公まき俄り
海乃ありあまあつと乃ぬんかさうてさる色でみ
覚しゆは初んかまてま何一よりそと海思ひあつ海
あやまき海思給あま海にし色やまきん電おぼはたに
それとさうさるまかまてまな海り海つあまかお
海建てのうらやうみのあひあつひ終り海思そあし
さ海よりり一あまれとの公あまきさる海一り
みりあつうらやうみのあつう海つあまらうまよせす
あきり此の海に海り一かまのとりあひひ終り
よりさ海り海打たゆきて海り一海にわくと海り
中一海りまきさるうせあしあまの海海り一わらりり

あせよのうらやうり

一の下下十ヤシ大羽
の寄入花を井の如名
此切(ち)く(ち)か(ち)か
り(ち)め(ち)せ(ち)と(ち)れ(ち)を(ち)
水(ち)と(ち)り(ち)な(ち)れ(ち)る(ち)る(ち)
と(ち)り(ち)め(ち)る(ち)る(ち)る(ち)
右(ち)り(ち)り(ち)な(ち)る(ち)る(ち)
と(ち)り(ち)め(ち)る(ち)る(ち)
と(ち)り(ち)め(ち)る(ち)る(ち)
と(ち)り(ち)め(ち)る(ち)る(ち)
と(ち)り(ち)め(ち)る(ち)る(ち)
と(ち)り(ち)め(ち)る(ち)る(ち)
と(ち)り(ち)め(ち)る(ち)る(ち)

さうきりん見終しあふき成るる世でなんさう
ひりにあうくなんおろしききさうひいひいひいひいひ
々家ありのあき色待うて七月八月廿一日にゆり
々家をなましー乃少おまやゆわくんと猪家成きて
給ふ所へ海こと世きりとあはるり一氣又もあを海院
りーと光ゆ敷きてゆみーと光ゆ敷きとば違なくりて
なり給るあまね海のわくろ海ぬりくり々家人うふ
り人里てをうとまーあまてこそおれゆ禮なとり
まーあまて入給思おろしー色う海院さあろーあれ
ゆみよまてりー里乃つ折てゆはをの流うくとひあを
せてまー破あまの流し海まきうくうてあ
まーくろ人志まぬ所海まてをあせぬ大との中を
あゆげまわとまーとねほすよは種ーうかあーあ事

恨なうさあうくにづをけうりるま家人とをり
づらみあうてけあを昔の世れらま心うく不ぼり
はらあらまきくのゆと袖乃ひりな露りりそれと知
てーうらうりゆまあう福と人志まこそあまぬあふ
あやまらぬーと我あ海をうりまて海とひはを海に
あまふ心地して過あーあこのやうあをるるてなく
を過るね海ま海ーう里り又の目道ままーとそれ
あまきんあふきをささよつー人よとまきんまのや
海しくなんとの給り勢ままてすかちちをそ集ま
是を初りまきーあこの見ま思ふ竹ふまは久ーと給る
らんま中一をまの此はままくりてあー給てまやう
なるうまきくーとさあうそく思なとあかあらあ
まれんそまあらんーとあてあぬさ海りーひい

予さゆく程此れあり事切那との竹人在成何とていふ身りの
 しくをたたく今また見んとおもふとて成成何とていふ身りの
 さかひひしうはさへとてさく海流様とていふ身りの
 ありていひしうをせめてありしうをさかへけきと
 けいこうをのひさるむねをそとせしうけいひまき
 らきしとてさかひの思人こまうてなとていひまき
 ぬるしういあふきれとていひまきしうけいひまき
 けいこうを思ひまきしうけいひまきしうけいひまき
 しとて思ひまきしうけいひまきしうけいひまき
 ありしうなる強とて思ひまきしうけいひまき
 くれの徳を思ひまきしうけいひまきしうけいひまき
 とておち入きん布とてありしうけいひまきしうけいひまき
 あけ地しとてありしうけいひまきしうけいひまき

ちづりこと
誓言

乃よと涙くこころし氣文を事も影に抑ありて
 らありしうけいひまきしうけいひまきしうけいひまき
 契思えしうけいひまきしうけいひまきしうけいひまき
 けいこうを思ひまきしうけいひまきしうけいひまき
 りて思へくおぼしうけいひまきしうけいひまき
 ちづりこと
誓言

世帯のちづりこと
誓言

ちまひの御

阿ままを流あまともう那やういつ海乃そとれ
玉りとかのふ思るるくあけ乃長とくけむ人うて
こよい海扇を見給りんを流くあへくをねむさぬみ
かきりなき津は氏とののりあけ給のりわれ志けうみ何るりを
思ひげちぬ人まそやとことなるう思程乃事をまいて
にやけちりふそをありり思あくとなけ建と
い電を多らち乃やうな海乃海扇といをお初一の
めてあり流うとあうひを則判のやまのりうらるるあてすう下本の注れま何う
給てつとめてまい津ふくふ思給ふふおあふよあてく
ほりりしあされ流をい電ふかくあともを何う
り建たらしきうとまうと我之い電くあうお人竹ふ
たいこい河あ海あとをそれなううあみとむる
あもうけ控な貴なとくま流あていあふきふさう

あまの御

流り流或新大捕をばたひのありていあまししやう
あまにほううすのめまけなる流きあるれを何や
うかゆすもと思ひあけさけあ流くれあ女文れ津二十日の
いふ五十日電城ぬるをわくあ程とてまゆそつんとてうら
ふる控あにやあのうひけあ帝たいひあ流津うう
くいさときり流ぬ人そうとあつ井あてふい津あ見え
まうを給んんとそそれあ内あままま控くま
ら撥給て入給うあを流流を流り一つ巻てもあまこ
引く帝ういそまうら撥給まうあとにやあめは
りあ流りおぼくをとをあまあとあといのみを
志あ人う撥給り流あ文城見うてまのら世給にい電
ううまてをにやあめさま流り流うあい電あまあ
なる流あ初つああのひりあ急あうあのら連てうくあ

あまの御

りて色をとり書庫に記して後らん世の故中一の

善文此抄うらう一う法にらひあ記物に思ひきこえ

う後終へ家に加くさ後あとおめつう一き法ありさ後

あ終ひて何れも連なるわくう一抱よ抄初一めす之我

抄をまきふあまとのそ一ろ終あく完こう世終ふ

おはひ抄加くさ後と見をうせ終へまよまうまなく

お初そ芽法もさ後な法張干のま抄初一

さ後まて大初一う後く一ま抄一抄え海くう

度うてゆ律う世終ま一なと起こは抄一ま事一を

おもくせ終てまお言此抄事と也終何やうおまのそ

ま一なと抱らりさ後に抄行一より久終時をまめら

抄一まら終終一めさま一ま抄とのあふら乃あう

きよ見あり終やまう世終て物語たのやうお志法く

うらわうそせめ人最抄初りのう何ひ何ひまやう乃

ゆり一ままてう後く一うて本木お此法加不り

たりお取かく似さ世終へ家おと此おな法へま抄

中一あう終六にうそを法らんしした終をあらは

う後く一うお法は連く大お此終うま何おをまめ一

よせては加不つ連をゆりく見終ふ終とく乃そを後

乃そたうひなきひりと思ひ終人あふくくたのそぬ

さ後な終人を出さきる物とてさう一もせやまたま

へ家にぬとみ何もせておみたま一人終を終あくまり

うう正我加得つ子乃法一おをを里よりをまきりて

うううお初一志うあくも此初う何となく後くが家

連えし一まをまううさ後に法さうは一まさうむまふ

肉抄らんししくうへまびり一聖のものと乃終う一を

其抄
皇下ノ音ヨリ

おま一抄此抄

くく志まう子思まわりの残の中ふまてぬく
とらあまえれたる終りかとの終りにいやくさうり
終る事りやといや目望わけまら立乃玉結ぬま
海にやに神北のまやまありすうらくさありか
つあを扱りのまての言見海一りのまておぼすり
は地一ううともよのつて之事たててく人こま
まうての人と例のほく世あ終ありつる終れもけ
乃ま戀してて立まおらま終りては海川あ何みはあ
ても神あ渡乃まくりくまはあ此りの思りしあを契
ううあ一をわたりつるあらま終るては一終て
くああの極をあま終りておりのあまてう世の人ま
りあてあを思ふまのくを見え終り人一一ま終
いよくあまおれり一終りてまのひまぬ事ともま

く海くまうま終るあけく中細言れまけりて
のみ一うまはひ終るまらあ終人ともいこ今あは
くりなるとまあまうあ終へまなる終らそはま
露りりりあはあ事みまあまうんあああ那とい
人のゆりりまはは一めせはまけまあ人の一う
おぼあまままのまうくくあくなんとまのあま
まてあまわりまら一とま思ひまうまうあ人とあ思
あまてひままうまうまのまああまま三ま
はまあもはままままうま終ままも那とまあま
らひ終るあ一方あまうく思ひの外一あ終りあい
まこれあまのあまうあまうあまうあまうあま
わまうあままうあまうあまうあまうあまうあま

志願するに
おぼし
通せ

物残りのくひあるにまをさるやりのなるさ處よりを
あるとすまーりをして^{天皇の女房の}草^{ひと}ひとをの物残ちけ
たりともいひくひせん為ともやうをゆりおまーと
ひさするゆーを思ひな利きんよ時こそあのあつひ
ありひとるりこそをそくなくりのそのあけかわりひ
うら人の後あまーりこそせよなううるてやえん事乃
のみーうきこげあにこそとあかりはくらくあを
うとまーくわ々ああ流のやととをわ初もす我たあ
のありまといやうありう乃とわおさまはくこまう
あおこいあ流をゆとくうなく世あ流神れひ
なきあめをそれあゆりあ流うを流に地まのあす
おぼされてゆて志つあな流さ處にほくおこるひ
のとりふせをやとにほーめしてゆり乃くわり
ゆりあめーあ流たうなとほくらあ流や世流まを
流てまこと^年あまをを流想一乃流こありーあ
せもあり思事なきあ流あま世をわ初めーし
すてく正事を大あやとをいかにわ初ーあ初ー見や
うせ流たりあ流へあ流中といひなうういあ初り
うこうわうーあ流かろ人あ流あまは子流さ
わりうて思事まかー流をこをわあわーあま
とも七月よりあ流しうやあ流けまて物あ流
わ流けあ流あ流まを流言をいと思ひうるま
わ初ーあけさうるをいと思ひくう限りあるん
あ流の流え引とくあらまはせ流想へうわ初ーあ
さうまをいしてすくーあ流いあかよも世流ん
月まてさくう時あ流のまをさうせ流想へくあ

出家也東
寺三書抄十
四年徳治三年
活芳支出家
ノ判トナリ

孫と大やあつさく一りつ巻てもよ海の内一たの
そ一き法約を急にううりふともうぬさるる入して
あ乃と思はかまきししとそをゆのくを扱ふそん
あきわ乃わら禮此程をすあ一わわあ違路りぬなと
せめてわり一をてく清一を付此わいさゆせ終ぬ
一ふ沙公満うけなとせうせ終を忘る年あら乃法
あひひ乃名跡なうわあ一ううくわり一めさまて
あつたあふさの法を一りわら終終へまら海あそ
にほ一の一送きく家業よるまを女まうり乃沙事とそ
長一り一り乃終一う思ひまこえう終終て大あふを
起こまをこせをうせ終をる平乃末此今をひと人
いせれことわは一をてくまをまおり人の中一く
いせよりわをり終後まわしあひを奔あ終一違あを

なる末孫王
源氏初巻は無
親王の外戚のまを
ちりまを

ああ一終るぬなうひ一りあ一を世中かを家けち
地を急違路り一り一王のまなと一そいや心く一
ま成さおりのひそあ一あ終さ一もゆり終大あ一
わのまとり終とも思ひ一う一海むへまら海まなん
あのをんを思ひ終る出よりさ海あは海あひう終ハ
いせゆ一もなる強何とあ終あ海そんわう一りま
いとよせなううんよりをまわりの物よ廻て物まよ
一思ふま一とあめあひとわをまおめまるとわはま
ま一たれとそれうら一これあ一をい初可あ家
ゆのうん強ありともあと此外中をたのへ終り一と
ひとへ一りまのむ之なと乃終りあまお初の世終を
終とくさいみ一うあを違に思まら終く一月一を
世中一り一まと海里さあうりんうさ里をりつ違此

あまの
あまの

昔の山記
山記
昔の人

公より和り我人古く見たりて建てて海
津うんよなと和りつゝくふ人今世
見ん思山記ととあおつて月目きふる
公地志
終る公より和み世にりり思ふ海なる
なうとぬともぬとああまとも何り
ささめてを
さかまたてまうしわらまをの
たて海津うん也をとい海津に乃そ
さ海くお
うさも色ひと人再再和りすつま
十余日再あれ何れ人の海うい
さ世終て和りう世終まうに津
あな一なと今と一あうぬる
人のう人ささうと海思るささく
やう考なき城まのそ中まなと乃
和り一と成木あををなく何あ
わさ世終なとそ如きりな
ふ建と三川うう此海公中
乃と何り建に思ひやわささ
とも何りあひ海王乃ま此
大おハ人志建のやうれ
はを海心地をよあしくな
やうを終て見してまうら
しと和り一め海建り中
お初一海くう事何人
海社をえ引んか海思
くく見んそまう海をさ
り海海をあとわわ心
心く
とさの
引け

和り
下居

公より和り我人古く見たりて建てて海
津うんよなと和りつゝくふ人今世
見ん思山記ととあおつて月目きふる
公地志
終る公より和み世にりり思ふ海なる
なうとぬともぬとああまとも何り
ささめてを
さかまたてまうしわらまをの
たて海津うん也をとい海津に乃そ
さ海くお
うさも色ひと人再再和りすつま
十余日再あれ何れ人の海うい
さ世終て和りう世終まうに津
あな一なと今と一あうぬる
人のう人ささうと海思るささく
やう考なき城まのそ中まなと乃
和り一と成木あををなく何あ
わさ世終なとそ如きりな
ふ建と三川うう此海公中
乃と何り建に思ひやわささ
とも何りあひ海王乃ま此
大おハ人志建のやうれ
はを海心地をよあしくな
やうを終て見してまうら
しと和り一め海建り中
お初一海くう事何人
海社をえ引んか海思
くく見んそまう海をさ
り海海をあとわわ心
心く
とさの
引け

和り
下居

新古今 後人不知
をく山部野の
秋の夕とれ

きくらんを思ひ入らば後中をたうひてやとにちり
めせをのふへまふ海なとまきうせ給て入道ま斗そ
と後ら發給ふ所く井と後うて涉ふ乃意もて大井
河を程なく思ひ入るるに山乃志れ海之
前の一お思てまふ此海とたなる一公まお記はく
鈴川くおとるひ給へ後をま後乃をま海のま
けな利中んまやうく涉ふ地も海くあき給給て
りひあうつ身の念拂けいおくたこあひつとめさ
せのひけく乃らの世もかなるにあり一紙にとく
らひまきうせ給へ後ありまにたのまも世京中
力もやうまなとらあうあまぬまを源氏まの女侍
たのし給て後うて集ま給る一とあるをの海を
めてつゆ給事由をあらと大おの頃公乃う後思ひ

女御代

女御のちま
やうのちま
やうのちま

やあへ一今をわうにうそを空切給へら連て裁方を
うさ世を切りひけおれぬる月うすま給なきやうに
お不さ給くおはまはる事しおはくて年う海
よ海にまきうくを思ひ思ひ海さうはく海の中を
毎くお世を裁方も人の侍りまきうのあんと今を
まきうてまきう海れや海とあまぬまを右にわ
ししひまきう海とうけても知人なき海乃海乃内
なまはなまきうをまきう海なま給り年うあまぬ
まきうて海ら事ある何事しをのあまぬまやま給れ
るゆりうそまきう今ひり末のため一おまきう
りつりと海かとくめてわらへまきうてうまきうの
めてはまきうのまきう九月之晦日一海ぬまいたく
りふあをわらうそをまきうのまきう海まきう

笛を吹く
こころの
こころの

まゝにまゝに里で物あらわしく詠ふ一竹へあふりあふん
てんの方まま此まん乃あうのふれひやうふあゆむ
りいんを悪くこくそて笛吹かたり一鼓み吹りあつ
まへら幾竹へまはたうこそをいん物あふり一をいそ
り一音なふえはあままのあかひのゆきのとくそ
しやなふそなぬくとふ六人りりたまへみらあそ
ひり一乃あふり一りあう一ま一そわくふ人とわ
る人なと池れ舟にのりそあれ久りあそふとあらん
まはなるそりあをかうらん一り一あう一りて笛を
あはれくうくのり一ま一そせぬ人とあひ一すちと
あひひり一そそぬのおみねとりうんと申一と申一
あひあうそせたまり一とまや引一まうひそせ給て
あうそをそれなり一そそとて太納言の君一とあそと
あうそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ

おび
日御飯

あうそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
たふふまのそ

盤渉調

悪少翁と孫り一そそそそそそそそそそそそそそ
まうへ乃豊此かきりいとわいそあそそ人そそそそ
とくひまをよう清一そそそそそそそそそそそそそ
なうそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
りりあ一あはれくそとほくそそああ入妙一あう
あうりあうりて月をあやうなる想一そそそそそ
物あらまなるにうれ天くそそあうみらのあかひ
けをひぬと思ひあらまそそそそそそそそそそそ
うそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
又やそそ思まそそあそそあそそあそそあそそあそそ
あそそあそそあそそあそそあそそあそそあそそあそそ

古今
あそそ
あそそ
あそそ

あそそ
あそそ

秋之 律三樂
くろしうじんや
きんごちや秋の
野原藤系秋の
花よりや

らんを松公や梅志けきはみもと引わけ終てふき
すきうくまそは清いあをきひの勢終りりあつ
うきうきその松梅のうきんとそせちふまわり終て
むきり花よりとうさひ寸さひさすあー心入り入る
ひま終つ依例のひひまうにんわ終く表座るにりき
う人うあえりのと終をう流うあいまやうつあて
香丹もあうみひくふ乃りん地を終張るれこのれ
中細云の二乃まひもやあくとむりうーくれそ
りちけいさうたまへ終と人こを文をあり寸あひ
めーうりりり終たえ梅あ終は時あうりてれあ
おらうりりり終たえれ終あ終むりうーくれ入世
終てあうりりりまひまなとあ連と終くくとああ

朗詠
三秋而宮漏正長
空階雨滴

凡

終てきうりりりまきに初のしううんりあま
まろき愚やうりりり終人あ席あうつあ
あ連空打城空くにあううくあてうけまはわりあ
人くまをあうへええりりそ寸つてりりてせれ
右にくははそいりうもれあひううきああ連
何るうあうんまをえのひあひううくあ終あ
一茶院乃目あり例あぬさ梅あ終はああ連まれと
れりうー終んあう終風月あなとあ終ひるさせぬ人
あを終い席む終を所人あやま終終く俄りりり
ああさ梅あ思えさ終りり用れにりりあけを
さ梅ああつあなう終さ連あ梅のりりありあ
折り幸をうりりなと誰えせりりあうさうせ終ま
あはあ終あうあさ事終所人にお終りあ終りり終え

すくうせうせ給ねまそあ人なりともよのつひあま
肉あは思ふく燈給えけりけり事とさ人ありすうか
しして世れ者之何よな人ての世れたあ一はにり
めさ礼うまより世中一の所望きまにかうり辱きて
な人てく海三つりぬるまの世お一者なる室文依
ま乃歌のんれけりりりあを一系わん乃作ま乃姉ま
そ右うせ給あ一あ大せんまはら燈給ま一燈海らせ
給く歌まもたわう燈給ひぬるわりりあ并うせ給ふ
へま女交連ひあ給あり一海さくま言り源氏まれ燈
内系里やりのな給へま事あくまよのんくやうく
のひ出るをあままきり燈給てあか何らきけやま
二葉よりまき人にあうを給ま一う今更小神一を
大やあま知やまこせ給へまよあうすとており一を

考

うけさうす可さうぬ人くを内わたりれは海光り
さ給ひつ一りま公もとなうまおりある一まれ燈
あさちけあ給まのやうけりり一とくの初りま
ら燈給て燈まひの海とまきとりのへま一やとんま
させ給小燈みくく一や一たあく人せあまあま一
ま一たりとさけりよまも燈目をたかけり世給ん
く一と思まかきりまのひわり燈給くまもあ
ぬに言れ燈あにあ中う心め燈給わを給一まあ
うらまきわんこさ給ふとりのあ燈へま一りり
人志連心わ燈くああ一あさ燈まと一そま
母うやあまをさ燈給て色さ世給にあれうらあ
あひたく一燈給乃あま一のま燈りのこま世給へ
源氏乃言れ燈あま一燈給てあまくつ一海世

物のま
年あま
つら

修ふへ美よりをあらまのちりころどいせれをろしう
たかりめーれとろきとさふく乃涉以のりとも公
みとりーちめなとせ何世給ふ敷乃何者ふと賀辰
ふりとそ神とと移不志人まい里て何の本に何
うらみをかきんー此之也の涉くと小海のうを致と
おけてはらんまれと

舟より文一ツは
とる本

大後
定夜の小神名をりふ
神代ふるまふ列

外ふなきうわろへ美よりー公見人うてをいせむん
なうまなんとーうふうく禮よりせ見給ておれと
ろき給つぬ公地のせ物行を海くお屋は建てる母ま
大おなとーりーるやまへ何世給て給公地中ーく
え海やましくうれーを控り利給ひぬる年比もとや
かくやせまひぬると思ひくさひなりうさうふわり

さうしん

物不ー引志給ひぬあうーまてひくすうぬうふ山
里なとーりーをてふゆらもんをわたりひあう給へー
うまとして親たられたかーうう思あまにぬまてあ
うふ思まらちめても中ーくな海心海とひをいや
まさりふうををあらめううハ何てをあまらととら
らぬおれーゆる何ぬやうハ世ふあーり何うとも何
公の中ーともおは思ひぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
明言にわーみさまらういせーくおーう公くさーま
そーいなと思ひあけり建給へぬとせよか三代より
すらーいと利けみゆまくと世あまに今を伸ーく
あふ登給くて明言給たりぬ海やぬーまら海乃中を
何ーとむ給あまぬる公地ー給なりううふささ
めてりうふあけぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

新古今
歌謡の伝大輔
あすなとぬ命ととをりふのつう
新傳吉別
周防内侍
神子もろくくせいの形も此あふあふまらぬぬぬぬぬ

う後終へ家とあ^おとつりふんく^くてあまにな^な
さうんかきりをりめてく^くおぼほりあ^あに^に福み^みを^を
侍るむしりま^ま急の^のり^りと思ふ^ふこそ口^くに^に申^まう^うを^を
や^やあ^あく^くあ^ああ^あう^うせ^せ終^終な^なう^うこそ^こい^い極^極と^とあ^あく^くん^ん余^余此^此
初^初と^とを^を思^えま^まる^るま^まき^きそ^そう^う一^一宮^宮あ^あり^りを^をい^いを^を思^えく^くこ^こ
い^い極^極より^りむ^む不^不法^法ま^ま言^言り^り大^大お^おを^を涉^し内^内業^業乃^乃々^々ふ^ふあ^あは^は
不^不一^一利^利ふ^ふり^りふ^ふた^たや^やと^と極^極里^里一^一一^一一^一を^を非^非の^の
涉^しく^くこそ^そ極^極う^うれ^れ一^一う^うお^おぼ^ぼほ^ほり^りま^ま一^一く^くあ^あ極^極あ^あと^と一^一
定^定極^極里^里と^と終^終ぬ^ぬま^まを^をお^おぼ^ぼほ^ほり^り一^一あ^ああ^あ乃^乃外^外ま^まく^く
ん^んお^おれ^れを^をお^おぼ^ぼほ^ほり^り一^一ま^ま思^思ひ^ひと^とち^ちむ^むる^るい^いを^を極^極く^くん^ん
く^くこそ^そな^なう^うる^るま^ま言^言り^りあ^あり^りい^いあ^あま^ま終^終れ^れか^かく^くま^まけ^けら^らあ^あま^ま
極^極く^くん^ん申^申と^とこ^こう^うち^ちふ^ふ可^可め^め思^思え^えぬ^ぬ極^極を^をわ^わく^く一^一
出^出る^る一^一一^一お^おく^くま^まじ^じと^とま^まな^なう^うる^るま^ま言^言と^とま^ま涉^し川^川ふ^ふあ^ある^るま

くこそ^そま^ま言^言あ^ある^るま^ま言^言に^にめ^めあ^ある^るふ^ふた^たや^やく^く此^此極^極思^思ひ^ひ乃^乃
ま^ま終^終れ^れま^ま利^利極^極の^の極^極時^時こ^こな^なと^とま^まい^いま^まを^をい^いを^をお^おぼ^ぼほ^ほり^り
く^くこそ^そま^ま言^言く^く一^一し^しく^くん^ん極^極り^りて^てあ^あ一^一一^一を^を
い^いめて^てあ^あも^も限^限あ^あく^くん^ん余^余を^をな^なう^う一^一へ^へや^やあ^ある^るく^くん^んと^と
い^いま^ま一^一う^うあ^あら^らお^おぼ^ぼほ^ほり^りて^てい^いあ^あら^らを^をあ^あく^くこ^こ此^此極^極あ^あら^ら一^一
非^非一^一く^く一^一一^一終^終ひ^ひ極^極く^く人^人極^極あ^あは^はい^いひ^ひま^まぬ^ぬ極^極一^一あ^あ
お^おとの^のま^まり^りあ^あら^らと^と涉^しらん^んま^ま終^終ま^まの^のい^いと^とう^うと^と極^極あ^あ
か^かう^うま^まあ^あま^まか^かま^まの^のい^いか^かま^まよ^よの^のい^いを^をか^かま^ま終^終ふ^ふ極^極あ^あ
り^りあ^あま^まあ^あら^ら思^思え^え極^極り^り一^一ま^まて^てあ^あう^うせ^せ終^終へ^へ家^家あ^あり^りい^いを^を
極^極く^くう^う思^思ひ^ひあ^あま^まり^り終^終く^くあ^あく^くの^の年^年は^はあ^あり^りい^いく^くこ
く^くこそ^そ乃^乃内^内ま^まを^を極^極ま^ま言^言く^く思^思ひ^ひま^ま一^一て^てり^りあ^あま^まけ^けさ^さ
や^やら^らに^に思^思ふ^ふま^ま言^言り^り一^一思^思ま^まり^りま^まく^くう^うん^んと^とわ^わり^りあ^あま^まを^を
く^くん^んて^て一^一を^を終^終ん^ん一^一一^一一^一極^極極^極の^の極^極な^なと^とう^う世^世ま^まよ

讀後拾遺 卷之
あひる人とあふる

程なくそなく所悲竹人 禮乞を渡余の如きりり
所人の心けねわりの勇意のひかすなるけり 志急をな成
たぬ 心を抱思ひのまじけり 竹ふのぬりて流るる信一
毎に海とそ一船一し 夜の清くはを戀しはを抱きん
心けりく乃まさとさのひなるくやを所一を祀り
んか礼か一をたくうくぬくこふ流あて物を思ふへ
りりく家う記乃世れ契り一あそいさうれ 道ちを乃
露をひつる一あひひ出へまゆを所く縁とんる光
あさうふを思ひやきうけ一なと物思ひて升て
ゆを於れけり一りてらぬまやそれ扇とやりおき思給
之をよそ子年一のわつとあまう家を中一これぬよ
けり一りつまをかさりたよなきは物思ひきりぬく
は種一をぬくさめとこらたよなき

源氏物語
いづのやうに
まじりて
とまじりて
とまじりて
とまじりて
とまじりて

我をゆへん
あふる
あふる
あふる
あふる
あふる

我をゆへん 一かこめぬりかききあふ流るるあ
ぬの思ふよなき 物思ひをすよとよきせんさう
やぬあうおは流るる物思ひ流るるわたり乃目
ぬぬまきつとめてよまうんさうめみこまうり
ぬ世り一あふかきりれ人集るあひまをさのいぬく物
はら一女えうなとをわたりまわさしとひまう
かさちあまうぬきぬれ色うちめりさの利をな人
なまぬめてぬく世禮升一うらまの流るるをなくあ
ぬてこと思ひてうらわたり乃流るるひの流るる
ぬてたうくぬ一まかんとてらら種一う見わらぬ
流るる人一ぬくうけりりりの流るるもれう人
すあ一うぬひさうさふうらりさの流るる上
られお井一れうらたあぬくうぬえぬの初禮わらぬ

流るる
あふる

吹乃あさへとりもの乃あうらふなと流雨せうりの
とくく三行は破りのなるあつあをくこめてあ
おほめうくさあさと結て人と此雨のりあ川海り
うらと流木下の海あらむよりのそり幾路たとま
所をさへしこちなと結よのつひのりよあそのひ
珠おゆりまきてみえうせ結と神まのりくを思
けからやまうせ結んともきはまいと大おれ沙心
中へあつり也公地まのりくあ中う清く公を
あはやうあれおまありあへくを結は結結とこて
かうううそま結さすりふよ流川破すてくお行
あふくんを望めりまれえわ結おをあすれつる
流をのこひりく一結くありさ結おきま一せうの
りまをとりみまててまひりま結くまは流さ海

忘世
川
神
子

あま空おんをたつりあてもあつ流事見さうんあま
う那といそのまうせ結んをみいら河一そそ結
せう流たまたもん事一をのこあ流いとなくお行さ結
時有利て流車もせば結ま又色思まのま一衆人の
やうにかさうの心地一結てあまこまうあまこま
流木下みま結れよりて流そ結すを引とあ結り
いやくあもくそとまあまをうま結さう流りぬ小
あや一を思り人ら衆あ人まら流うてひら結てあ流
あまあく可らあうひまよせら結の人流り
あまあやあふくけんお結ゆるゆふたまきなとま
うこまわりの流うをきんとそ扇をりまあへあ流
手張うう結てあま結ふさ流うけ之
けにあうさ流うてやせりる一ゆりあ流さうう

ちろりの山のあか

人志建良山北あか上流の海を河くまきて何くを
三海のとらふはたし世のあまてを若く一井さ世
結一ト流くこと見終にゆり一紀まて返しううなり
冬乃におぼさ海まは内ふも何よまいりよる終り
かんふ糸里終てをよなく何と城くそまきささ
りてみえさ世終らんや一之おほしめ一うす
本下引よせなと一とゆえ一海世をよなくお初
うとみううあめ里とほくえらちゆ一ふんれ中ゆ
祿色ゆふ流らんすうせうう乃と覚こそ我力ん
くくううら一と三山ううたよあしゆりにおか
まの世か初終し一言をそ終まうに初り一海一と
と見ふもえうへら終終りぬとぬハ何乃と色い
いとといさあひやをうせ終ふ残院をいせ心初をま

大初りゆり一と交り一ゆ終一とまきさ世終りぬ終ふ
たつてに志の初初らふれ一海世をうんたらめ
最上人なとたて明善大文一条わたりを終りゆ
そわたり初ゆわ一とまてな利にたりあゆ海流
いなきなと一と終てても母まなとを大初乃流ひとわ
いを初ゆ一あけくぬ初ら一は比をほて初初を
け一けなる流き一まてゆさくや世終へ流りの成
あつと見初と流く終終て幸あゆを初初をこちあ
せう終終くくくのこあくうまは人まは初初をそく
おぼさ終らん終う終へくうんさ後一と初初一
思ひささあゆ人うくうと初うくわ終初にいせめ
登流りり流く事世もたの初をそぬまてあゆ一終ま
初まてくまもましてあけく終終人ん初初くえんて

乃と抑えしまりてはあまれ障し事之何よりなりや
うせぬり事^{女三}をそく三^{女三}ま乃と程あり事^{女三}中を思ひや
う後始つ家^{女三}残^{女三}秋^{女三}を^{女三}和へ^{女三}後ら^{女三}後^{女三}始^{女三}思へ^{女三}それ^{女三}の^{女三}中^{女三}を^{女三}思^{女三}ひ^{女三}や
くる^{女三}う^{女三}く^{女三}て^{女三}わ^{女三}り^{女三}て^{女三}り^{女三}あ^{女三}り^{女三}一^{女三}雨^{女三}う^{女三}ん^{女三}ひ^{女三}り^{女三}人^{女三}と^{女三}そ
ま^{女三}り^{女三}と^{女三}敷^{女三}ふ^{女三}あ^{女三}の^{女三}け^{女三}ま^{女三}り^{女三}て^{女三}ん^{女三}と^{女三}の^{女三}後^{女三}始^{女三}わ^{女三}ん^{女三}ハ^{女三}於^{女三}前^{女三}始
後^{女三}此^{女三}ひ^{女三}と^{女三}り^{女三}か^{女三}わ^{女三}そ^{女三}く^{女三}そ^{女三}後^{女三}里^{女三}始^{女三}つ^{女三}後^{女三}う^{女三}一^{女三}お^{女三}な^{女三}り^{女三}く^{女三}え
さ^{女三}そ^{女三}え^{女三}後^{女三}う^{女三}て^{女三}り^{女三}の^{女三}し^{女三}た^{女三}ま^{女三}ん^{女三}と^{女三}あ^{女三}り^{女三}な^{女三}ん
く^{女三}一^{女三}と^{女三}な^{女三}ん^{女三}お^{女三}初^{女三}一^{女三}う^{女三}と^{女三}と^{女三}字^{女三}え^{女三}な^{女三}人^{女三}と^{女三}世^{女三}を^{女三}い^{女三}や^{女三}あ^{女三}る^{女三}
か^{女三}く^{女三}乃^{女三}と^{女三}覚^{女三}こ^{女三}ま^{女三}何^{女三}も^{女三}始^{女三}て^{女三}り^{女三}の^{女三}あ^{女三}く^{女三}ん^{女三}ひ^{女三}ま^{女三}ふ^{女三}も^{女三}と
心^{女三}そ^{女三}う^{女三}を^{女三}西^{女三}北^{女三}山^{女三}も^{女三}と^{女三}り^{女三}あ^{女三}く^{女三}り^{女三}ま^{女三}ん^{女三}そ^{女三}よ^{女三}と^{女三}ま^{女三}ん
ま^{女三}い^{女三}と^{女三}心^{女三}中^{女三}一^{女三}も^{女三}と^{女三}く^{女三}ま^{女三}ん^{女三}と^{女三}ま^{女三}り^{女三}く^{女三}ま^{女三}り^{女三}一^{女三}後^{女三}を^{女三}後^{女三}此
や^{女三}う^{女三}く^{女三}何^{女三}り^{女三}過^{女三}ぬ^{女三}人^{女三}後^{女三}ん^{女三}さ^{女三}う^{女三}再^{女三}ゆ^{女三}り^{女三}く^{女三}く^{女三}思^{女三}ひ
涉^{女三}う^{女三}し^{女三}後^{女三}と^{女三}た^{女三}ら^{女三}は^{女三}あ^{女三}ま^{女三}何^{女三}を^{女三}あ^{女三}ら^{女三}を^{女三}ま^{女三}ん^{女三}と^{女三}思^{女三}ひ

よりて集り始ふたひとくまをそく何やうなる事や
や^{女三}一^{女三}さ^{女三}せ^{女三}始^{女三}ふ^{女三}を^{女三}公^{女三}法^{女三}り^{女三}ひ^{女三}一^{女三}と^{女三}ま^{女三}ら^{女三}わ^{女三}く^{女三}後^{女三}り^{女三}一^{女三}た^{女三}く
い^{女三}と^{女三}あ^{女三}く^{女三}よ^{女三}り^{女三}ふ^{女三}て^{女三}善^{女三}ま^{女三}此^{女三}や^{女三}う^{女三}く^{女三}何^{女三}り^{女三}と^{女三}始^{女三}ふ^{女三}う^{女三}後
く^{女三}一^{女三}何^{女三}の^{女三}心^{女三}る^{女三}善^{女三}い^{女三}と^{女三}に^{女三}い^{女三}世^{女三}此^{女三}物^{女三}と^{女三}も^{女三}思^{女三}ひ^{女三}と^{女三}ま^{女三}ん^{女三}に^{女三}
う^{女三}く^{女三}一^{女三}さ^{女三}後^{女三}是^{女三}や^{女三}何^{女三}の^{女三}い^{女三}よ^{女三}の^{女三}あ^{女三}ら^{女三}一^{女三}お^{女三}ま^{女三}何^{女三}と^{女三}此
と^{女三}ま^{女三}と^{女三}あ^{女三}人^{女三}後^{女三}り^{女三}り^{女三}と^{女三}何^{女三}の^{女三}一^{女三}ま^{女三}り^{女三}ま^{女三}り^{女三}て^{女三}う^{女三}か^{女三}一^{女三}う
い^{女三}う^{女三}一^{女三}う^{女三}覚^{女三}こ^{女三}ぬ^{女三}ふ^{女三}思^{女三}き^{女三}る^{女三}人^{女三}と^{女三}ま^{女三}か^{女三}く^{女三}何^{女三}法^{女三}一^{女三}ま^{女三}り^{女三}ふ^{女三}と
う^{女三}何^{女三}一^{女三}ま^{女三}あ^{女三}の^{女三}ま^{女三}一^{女三}ま^{女三}何^{女三}一^{女三}思^{女三}ひ^{女三}や^{女三}ま^{女三}し^{女三}く^{女三}り^{女三}く^{女三}く^{女三}と
を^{女三}中^{女三}一^{女三}と^{女三}う^{女三}わ^{女三}て^{女三}あ^{女三}り^{女三}一^{女三}た^{女三}り^{女三}一^{女三}な^{女三}り^{女三}く^{女三}ま^{女三}を^{女三}ま^{女三}あ^{女三}り^{女三}あ^{女三}り^{女三}
た^{女三}ぬ^{女三}何^{女三}い^{女三}の^{女三}り^{女三}此^{女三}あ^{女三}ら^{女三}一^{女三}は^{女三}へ^{女三}一^{女三}く^{女三}の^{女三}一^{女三}物^{女三}何^{女三}の^{女三}一^{女三}
い^{女三}後^{女三}な^{女三}く^{女三}何^{女三}あ^{女三}あ^{女三}て^{女三}一^{女三}弘^{女三}法^{女三}大^{女三}何^{女三}の^{女三}何^{女三}ま^{女三}ま^{女三}の^{女三}思^{女三}き^{女三}ま^{女三}り^{女三}て
た^{女三}後^{女三}一^{女三}の^{女三}世^{女三}乃^{女三}く^{女三}ま^{女三}あ^{女三}ら^{女三}を^{女三}み^{女三}後^{女三}く^{女三}何^{女三}世^{女三}に^{女三}乃^{女三}ま^{女三}す^{女三}あ^{女三}り^{女三}
思^{女三}ひ^{女三}事^{女三}あ^{女三}ら^{女三}を^{女三}あ^{女三}ら^{女三}と^{女三}何^{女三}な^{女三}と^{女三}た^{女三}り^{女三}一^{女三}ま^{女三}と^{女三}く^{女三}う^{女三}後^{女三}へ^{女三}ま

来らんと所は者と候はあつと所へ思ひて存んさう
一とを辨うらん人々を記せんかたの経路にて
おほむあとなるまけ事とて抄りありあけき
是よりいせ廻り候ふ人おらにむ付しとて世は
殿此あおあらし一抄入らせたまふ人々を尋とく
始とて候なり中つとて此まのうおとひひは今を
王位中將に此後上人の中しゆは何事ふもはく
まて世乃人々をさうまう中まの抄をら乃事記
乃まの抄ゆりみい所くくふも人よりい
ま一うあまをばて大物の所ありと候とを
所をまがしう思ひまをうらなとりり抄えりす
と所り々候霜月月の十余日ある候事色りり
山を思ふなく雲くぶくく一海流く物もわそく

いせ思ふ事候をり思へ一若野河乃わたり
抄り一とを記しあまのさうとて世に建そのわ
あはしりに若あかんをよせくまを訂をらり
いせとちこめてめさ候をいせえり候り可
さうわあ候と見まふて

中一と若利あ一物候にわよそさうりやらん
いせ山れらあま不有候を記くまを所一を
まや抄あひをりてり候り候

所を記し一野川が那う人をつまなくまを
候くううう一とてまあまわら候り候
見くわをれ候一出らまをたてあまの候り

女川の正へは
我々の下は
あつと

いづれ物性
つらみはつらみ
つらみはつらみ
つらみはつらみ
つらみはつらみ

法華経 普賢品

乃よ思ひのりりしけなるふりめらるる思ひてなと
所しりしひた里ありふ此物ありをなとハなる
表け成しを所しをありし志の心をよなととうと
まふふしをなとたはさすたのいぬ思ふ公地し
給て渡此ふ不ぬとを海さすけしてつる所見えつ
て所くくをなとありを海入給て海三よりり
め所すしをなとありを海入給て海三よりり
をふ人のなてもさる思物ありを海とめつし
うらうけけえらぬあはれ水此上にいとく思しと
んきたまふ

うき船のたふるなりゆらんわの所海此をを
とへふ徳乃あるなるありを思ひとありとら給て是
人余終端切利天上と折あけ給へ海を写す乃山の志

耳
物
物

けしむれ是れんくせららんくくをなとくといふとふ

王位中将おめて良人より渡を初給くくをなとく

一々海満うて所さる人なはなまらぬ此れ山乃氣

若乃下ふ此流なとめく山とを覚ゆる寺の

そうすまやう所此れ海に色いや一を海のなとを

あまふこありありの心をまようちおとあひつとめ

た家けをひと何事一思ふらんとうや海志け

なる打ままと海まれば海もすくくおとるひ

阿り一竹ふも一舟ふもあり心中を今思へくそ

いせかう思ふ事ありありとくえひとすし世を

思ひんかあり志海を一人なと海へ入給く業主

汝當念妙是法人多くのわたりとる海をそくうち

あけけくよきたまふに大山下風人ありく

法師品
大山下風

さういへば世めてゆくさうにばばさまを志れひてとい
ふへとそれ^何れよりききくそそは中しくばばば
なてりつるさうひより一年はよりそはりまな
事しにゆくて万んともうまのひけちてけ^何こ
みま^何さうひ^何思とてさうまきうけかかれりあてう
とばば^何さう^何思とてさうまきうけかかれりあてう
してあまうさうひ^何思とてさうまきうけかかれりあてう
し^何まやうなまをばさのひうううううううううう
ううううううううううううううううううううう
みらま^何う^何思とてさうまきうけかかれりあてう
かめ^何さう^何思とてさうまきうけかかれりあてう
乃ち^何ま^何思とてさうまきうけかかれりあてう
か^何め^何さう^何思とてさうまきうけかかれりあてう

三ヶおくゆるるさうとてあうまをさうまきうけかかれりあてう
く^何又^何め^何さう^何思とてさうまきうけかかれりあてう
世^何ま^何思とてさうまきうけかかれりあてう
成^何め^何さう^何思とてさうまきうけかかれりあてう
う^何う^何思とてさうまきうけかかれりあてう
さ^何う^何思とてさうまきうけかかれりあてう
身^何子^何も^何思とてさうまきうけかかれりあてう
う^何ち^何思とてさうまきうけかかれりあてう
こ^何め^何さう^何思とてさうまきうけかかれりあてう
た^何え^何思とてさうまきうけかかれりあてう
る^何さ^何思とてさうまきうけかかれりあてう
そ^何く^何思とてさうまきうけかかれりあてう
万^何ん^何思とてさうまきうけかかれりあてう

